概　要　報　告

実施期日	８月４日(金)
部 会 名	中学校　総則部会

神奈川県研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実

テーマ

『　葉山町における「はやま科」構想に向けた中学校の取組　』

提案概要

町では、新しい時代に向けた学校教育を基盤に、人口動向や施設の老朽化を踏まえて小中一貫校の設置に向けて取組を進めている。

〇小中一貫に向けた取組

町での取組の一つに「はやま科（仮称）」があげられ、行政と学校が一体となって、これからの町の教育の在り方について検討してきた。「はやま科」とは、「身につけさせたい資質・能力」の獲得に向けて、総合的な学習の時間を軸として小中学校が一貫して系統的な学習を進めるための町独自の取組である。探究的な学びを継続的に行い、社会に求められている資質・能力を育成していくことを目標とし、これから研究を進めていく中で、はやま科として特色あるカリキュラムを作成することをねらいとしている。また、学校では、小中連携協議会を設置し、小中一貫を目指して連携をどのようにすすめていくかを模索しており、英語科や美術科をはじめとする教科において可能な範囲で「乗り入れ授業」を行っている。また、国語科の「小中合同授業」では、本のPOP作成をして系統的な学習をするとともに、町の書店や図書館とも連携した取組を行っている。これらの実践を通して、小中一貫校設置に向けた職員の意識も少しずつ変化していった。

〇育てたい生徒像（資質・能力）について

町では、平成30年度に町全体の「９年間で育てたい子ども像」を策定したが、今後、これから変容していく社会に対応していくためには教育目標の見直しを図る必要があると考えている。その見直しの視点としては、ＯＥＣＤのラーニングコンパスで示されている「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマに対処する力」「責任ある行動をとる力」や、56の能力に対する需要の変化に示される「問題を発見する力」「的確な予測」「革新性」「情報収集能力」等を踏まえ、生徒が身につけるべき資質・能力がどのようなものか、どのような教育活動が必要なのか、現在も議論が進められている。その中で、学校教育目標の見直しとともに、総合的な学習の時間をはじめとするカリキュラム・マネジメントの必要性に迫られている。町内には、９年間を見通して学校教育目標を小中で統一した学校もある。

提案校では、教員のグループワークを通して、今後の社会の変容を予測し、町の子どもに必要な力・強み・課題点を抽出して、育てたい生徒像・つけたい力を議論した。その中で、「変化に対応する力」や、「変わりゆく時代への忍耐力」「適切に判断・決断・行動する力」などが必要だということが共有された。そして、それらの力を育成するためには、教科学習に加え、探究的な学習を有効に位置づけることが重要であると再確認できた。答えのない学びを創造していく探究的な学びとしての総合的な学習の時間へと意識が変化していった。

〇提案校での実践上の工夫

校内で共有された育てたい生徒像・つけたい力を踏まえ、各学年で年間の指導目標や指導計画の立案へと入っていった。例えば、１学年の総合的な学習の時間では、それまでは実施する行事によって目標が異なり、各行事に合わせて、その前後で総合的な学習の時間をあてていくという形だった。それを、１学年の目標を「自ら課題を見つけそれを解決する力」「他者と協働して課題を解決する力」「ドキドキ・ワクワクしながら学べる力」の３つに統一し、それらを身につけるために、どのような学習活動を実施し、どのように総合的な学習の時間を探究的な学習としてすすめていくのかを議論した。その結果、年間の探究学習のテーマを「町の魅力を発信しよう」とし、これまで行ってきた行事を目標に合わせた形で町内のウォークラリーや、町内の有識者インタビュー、他地域を実施調査、と内容を変容させていった。同時に各教科との横断的な連携に着目し、社会科や理科、英語科、国語科と連携しながら町の魅

力を発信するという教科横断的な学びを実現するカリキュラム・マネジメントにつとめた。
　また、「こどものための人材バンク」という団体を窓口に、様々な地域の方々に協力をいただいて、地域連携しながら探究的な学びを進めることができた。
〇カリキュラム・マネジメントにおける成果
・行政と学校が連携して、これからの子どもたちに必要な資質・能力を検討したことで、町全体で児童・生徒を育む土台がつくられた。
・全職員で学校教育目標の見直しを行い、町における向かうべき教育の在り方を共有できた。
・時数の確保や、学習内容の質の向上に向けた、学校行事や学年行事の在り方自体を再検討できた。
・各教科の指導項目との教科横断的な関連を模索する土台ができあがった。
・課題を身近なものに設定したことで、生徒がより意欲的に取り組めるようになった。
〇カリキュラム・マネジメントにおける課題
・総合的な学習の時間の見直しに対する、業務的な負担を感じている職員が多い。
・継続的な協議や、外部機関との調整時間の確保が難しい。抜本的な業務の見直しが急務である。
・小中一貫教育を掲げる中で、それぞれの活動が単発的であり、小中９年間のつながりに課題がある。
・生徒の意欲を高く維持できるよう、綿密な学習計画、柔軟な対応、意欲に応じる土台を整えていく。

質疑応答

Ｑ１　こどものための人材バンクとはどんな組織なのか。またどう活用しているのか。
Ａ１　学校で求める人を相談すると、こういう人がいますよと紹介してくれる組織。例えば、自然体験をするのに焼芋が得意な方を紹介してくれたり、平和学習をするのに詳しい方を紹介してくれたりする。
Ｑ２　「はやま科」の今後について、どんなふうになっていくといいか。
Ａ２　今後の社会には、子どもたちが主体的に動きながら、自分で課題を見つけて、課題解決に向かう力が求められている。そのための知識や経験を小中一貫の９年間で、系統立てて育てていけるといい。
Ｑ３　探究学習のテーマを決めた経緯はどうか。子どもが主体的に学んでいくための手立てはあったか。
Ａ３　テーマは職員もかなり迷い、手探りの状況だったが、本音をいうと取り組みやすそうというのが大きい。地域の魅力を発見することや、誰にどうやって発信するかというところを探究させている。
Ｑ４　１学年で町の魅力を発信した。では、その後、２学年、３学年の展望はどうか。
Ａ４　１学年で学んだ探究学習の在り方、発信の仕方を活かし、平和学習に意欲的に取り組ませたい。
Ｑ５　授業実施特例校の話題が出ていたら、その辺りの話を伺いたい。
Ａ５　特例校に手を挙げているという状況はないが、横断的にできるところはないかと模索している。

協議の柱及び協議概要

協議の柱「カリキュラム・マネジメントの観点で、各校が取り組んでいる活動及び苦労や成果・課題」
・行事の変更にともない、教育課程の変更をどう進めたのか。業務の中でどう時間を生み出したか。
[回答]町全体の動きであることが背景にある。また、校長に行事検討委員会を立ち上げていただいた。余裕はないが、校内研究の時間を活用した。自分が手放していい業務を考えることも必要だと感じる。
・カリキュラム・マネジメントについて考えていくのに、学校単位で考えていくのは難しく、町全体、市全体、行政単位での協力が必要不可欠だと発表を聞いて感じた。また、他者を巻き込んでいく力はどうやったら身についていくか。[回答]共感してくれる先生を増やしていくことが必要である。

まとめ概要

〇子どもの生きる力を育むためには、教育課程を軸に学校の教育活動の質の向上を目指すことが必要で、トップダウンでなく全教職員で話し合って進めていく必要がある。また、目指す子どもの姿をしっかりともって教育活動を進めることがとても大事である。
〇学校教育目標を受けて子どもに育てたい資質・能力の視点からカリキュラムを見直すことが求められる。目的を明確にして、育てたい子ども像、身につけさせたい資質・能力を全教職員が共通理解することが必要である。なぜなのか、どうしたらさらによくなるかを子どもとともに考えられる授業づくりが大切である。学校は地域とともに歩む時代となった。コミュニティ・スクールを活用し、教育活動に必要な人的・物的資源をカリキュラム・マネジメントの視点から効果的に活用していくことが重要である。